

1981年の写植機

1981年の写植機

小形克宏

1981年1月21日、西新宿六丁目唐川ビル

「小形くん、ちょっと来て」

村西くんは奥の編集室から顔だけ出すと、そう言って作業室で荷造をしていた私を招き入れた。ここは西新宿の外れにある唐川ビル。青梅街道からすこし入った裏通りにある、ビルとは名ばかりのモルタル造の薄っぺらな二階建。その一階にマンガ情報誌『P』編集部があった。

この頃、ミニコミ誌は黄金時代を迎えていた。『話の特集』『ビックリハウス』『本の雑誌』『奇想天外』といった、零細出版社が刊行する比較的部数の少ない、しかし元気いっぱいでも種多様なミニコミ誌が、若い読者を獲得するために個性を競い合っていた。

『P』もそんな雑誌の一つで、今注目すべきマンガ家やマンガ作品をいち早く取り上げて教えてくれた。たとえば倉多江美、樹村みのり、大友克洋、高野文子といった、『少年ジャンプ』だけ読んでいたら一生知らなかっただろう作家の存在を、まだ十代だった私に教えてくれたのは『P』だった。ミニコミ誌にはその雑誌を読まなければ知ることができない、特有の情報が満ちあふれていた。それだけではない。ページを開くと読者の投稿がたくさん掲載されていて、まるで深夜ラジオのように見知らぬ同世代の心中を覗けるのも、ミニコミ誌の面白さの一つだった。

大学三年生になっていた私にとって、就職は嫌でもやってくる現実だ。高校時代からこうした雑誌を愛読してきた私が、やがて自分もミニコミ誌を作ってみたいと考え始めるのは、ごく自然な流れだった。しかし三流文系私大の学生にとっては、零細出版社だって遙かに仰ぎ見る高嶺の花であり、自分より優秀な他大学の学生に交じって就職活動をして、正社員として採用してもらえとは到底思えなかった。

そんなある日、『P』の誌面の片隅に“無給スタッフ募集”の記事を見つけ、飛びつくように応募したところ、十人近くの集団面接でなぜか一人だけ合格、前年十二月からタダ働きの“バイトくん”の一人として働きはじめることになったのだった。

通い始めてまもなく、人々が交わす四方山話から、少し前に編集部的主力が内紛でごつ

そり抜けたこと、だから現在は極端な人手不足に陥っていることを知った。道理でいつ行っても閑散としていた訳だ。

知識も経験もない、ただ出版業界の片隅に潜り込みたい一心で応募した私にとって、この状況は紛れもなくラッキーと言えそうだった。サルの手も借りたいと、素人でも正式な編集部に抜擢してくれるかもしれないからだ。ところが入ってから約一カ月、バックナンバーの発送や、作家リストの清書など、あまり編集とは関係なさそうな単純作業ばかりやらされる毎日だった。まあ「無給スタッフ」なのだから仕方ない。とはいえ……。そこに村西くんのお招きだ。

村西くんは私より数年先輩、早稲田大学を留年し続けているという噂だった。男性ながら『妖怪ハンター』の稗田礼二郎ひえだれいじろうみたいなストリートロングが特徴で、物静かで理知的な雰囲気だが、怒らせるとちよつと怖そうだ。村西くんは人気のない八畳ほどの編集室で、自分の机の隣りに私を座らせると言った。

「今日は小形くんに編集の仕事を教えるね」

彼は自分の机の上に並べられた『P』のバックナンバーから一冊を抜きだすと、ページを開いて私に見せながら言った。

「ウチに限らず、どんな雑誌も版下といって、まず誌面そっくりの原形を作り、それを印

刷しているんだ。通常版下は印刷所が作るものなんだけど、ウチは記事の担当者が自分で版下制作することになっている。だから、まずその作り方を覚えなさいといけない。でも版下を作るには向き不向きもあるんで……」

そう言つて村西くんは、私のことを細い目で探るように見た。

「ひとまず今日は、版下を作るために必要な、写植の出し方から覚えてもらうね」

「写植……？」

「うん、版下の文字の部分を写植というんだ。原稿を写植屋さんに持って行つて、それを写植機という大きな機械で打ってもらい、打ち上がった写植をきれいに切り抜いて版下用紙に貼っていく」

そう言つと、開いた『P』の本文の部分を指さすと言つた。

「この文字も筆者の原稿を写植で打ってもらつただけで、写植屋さんが打つためには原稿だけではなく、それをどんな種類の文字で、どんなサイズで打つのかつていう『写植指定』が必要なんだ」

村西くんは机の一番上の長い引き出しを開けて、透明なプラスチック・フィルムを取り出して、私の前に置いた。なんだろうこれは、升目がびつしりと印刷されているが、よく見ると一行ごとに升目のサイズが異なっている。右端は米粒のように小さいが、左に行く

ほどだんだん大きくなっていき、左端は一円玉ほどの大きさだ。

「これが級数表。写植の文字サイズとか行間を測るもの」

見ると一行ごとの上端には、右の行から左の行へ “7” “8” “9” “10” “11” ……と番号が印刷されていて、その番号のすぐ下に同じサイズの升目がずらっと下端まで伸びている。番号の最初の方は順番に一つずつ増えていくが、途中から二つ飛ばし四つ飛ばしになり、最後の方は “32” “38” “44” ……となり、左端は “62” だ。

「たとえば “9” というのは九級、“50” は五十級というサイズで、その横に並んでいる升目はそのサイズの原寸なんだ」

そう言うと、村西くんは級数表を本文の上に当てた。しばらく級数表を両手で細かく動かした後、動かないように抑えながら言った。

「見て」

なんだろう。私は腰を浮かして村西くんの手元を覗き込む。見ると一ページ四段で組まれた本文のうち、一番上の段に級数表が重ねられている。

「最初の一行目」

言われて本文冒頭の行を見ると、本文の文字が級数表の升目の四角にまるで原稿用紙のようにびたりと収まっている。升目の行の上には “9” と書かれている。

「九級の升目の行にきっちり合っているでしょ。ところが……」

村西くんは級数表を少し右にずらして、隣の「10」の升目に一行目を合わせた。今度は行頭の文字は合っているが、行末に行くほど少しずつ升目と文字のずれが広がってしまっている。

「隣の十級の升目だとずれてしまう。だから、この文字のサイズは九級と分かるわけ。それだけじゃなくて字詰め、つまり一行あたりの文字数も測ることができるよ」

そういうと、また一行目に九級の升目を合わせた。本当だ。縦に並んだ升目には、十文字ごとに「10」「20」「30」……と数字が入っている。さらに五文字目、十五文字目、二十五文字目……と五文字分ずれた十文字ごとの升目に「●」のマークが入っている。これらの目印を頼りにすれば、その行が何文字なのか簡単に測ることができるのか。

「でも、級数と字詰めだけ指定しても、写植屋さんは写植を打てない。これを見て」

村西くんは、今度は級数表をそのまま九十度動かして横にすると、また両手で文字に合わせて細かく動かした後、級数表を固定して言った。

「ほら」

今度は各行の一字目を横断するように級数表が当てられている。みると、文字のサイズより三段階大きい十二級の升目の中央に、行頭の一字目がぴったり収まっている。し

かも最初の行から最後の行まで全て見事に合っている。すごい、一枚の級数表でいろんなことができるんだな。

「行と行の間隔を行間といい、単位は歯で表す。 $12''$ の升目に合っているから、この写植の行間は十二歯ということだね。つまり、級数表で文字のサイズや字詰めだけでなく、行間や行数も測れるんだ。ここで大事なものは……」

そう言うのと、村西くんはちょっと間を置いて言葉を継ぐ。

「一歯は $0 \cdot 25$ ミリ、つまり一ミリのぴったり四分の一ということ。たとえば四歯は $0 \cdot 25 \times 4''$ だから一ミリ、十二歯は $0 \cdot 25 \times 12''$ で三ミリちょうど。このようにミリは必ず歯で割り切れるんだ。ちなみに、級と歯は同じだけど、文字サイズを表す時だけ、歯ではなく級を使い、それ以外の行間とか字間、つまり文字と文字の間隔を指定する際は歯を使う」

村西くんって頭いいんだな。昔から算数の苦手な私は、ちょっと話しに追いつけない。村西くんは私に『P』と級数表を渡して言った。

「分かるかな。ちょっと自分でも測ってみて。テンとかマルがあるとずれちゃうから、そういうのがなるべくない行を探すといいよ。それから見出しは字間を詰める場合もあるから、級数表でうまく測れないことがある。本文なら級数と字間は同じだから、本文を測る

といい」

言われたとおり、私は『P』をめくっていくと、本文に片端から級数表を当てていった。算数の苦手な私にも、これらの記事の全てが、紛れもなく写植特有の“歯”で作られていたことだけはよく分かった。ということは……そうか、今まで知らなかったけど、いつも読んでいる本や雑誌も、みんな写植で作られているということだ。私はワクワクしてきた。なんか世界の作り方の秘密を教えてもらったみたいだ。だって、写植さえ理解すれば、自分にも本が作れるのだから。

そんな私を見ながら、やがて村西くんは自分の机の上に立てかけられていた、古ぼけた大きめの茶封筒を抜きとった。

「これはさっき写植屋さんからもらったものだけど……」

中から表面がツルツルした厚手の白い紙を取り出して言った。

「写植っていうのは、これ」

そこには比較的小さな文字が一定の字詰めで、全体が四角く印字されている。そう、いつも私が読んでいた雑誌の本文そのものだ。村西くんは写植を机の上に置くと、今度は封筒から十枚ほどの原稿用紙の束を取り出して、隣に置いた。

「これは写植の元になった原稿。ほら、原稿用紙の余白を見て。赤鉛筆で何か書いてある

でしょ。これは僕が書き込んだ写植指定で、書体、級数、行間、字詰めなんかを指定してあるの」

原稿用紙の何も書かれていない部分には、大ぶりの赤鉛筆の字で“M、9 Q 12 H、1 L 18 W、バラ打ち”と殴り書きされていた。なんだこの暗号は。

「この“M”というのが書体で明朝体の“M”。“9 Q”というのは文字サイズが九級ということで、級を早く書くために“Q”にしている。“12 H”というのは行間十二歯で、やはり歯を早く書くために“H”にしているんだ。“1 L 18 W”というのは“1 L”が一行当たりという意味で、“18 W”が十八文字、つまり“一行十八文字の字詰めで打つ”という意味。ここで字間を指定していないのは、とくに指定しなければ級数と同じと見なされるからなんだ。つまり、書体、級数、行間、字詰め、四つさえ指定すれば、写植屋さんには写植を打ってくれる」

「バラ打ち、っていうのは？」

「タイトルとか本文など、かたまりごとにバラバラに打つということ。まあ、今はあまり気にしなくていいよ。ついでに言うと、うちは情報とかコラムみたいに短い文章は9 Q 12 H、評論みたいに長めの文章は10 Q 15 Hだからね」

「キュウキュウ・ジュウニハとジュツキュウ・ジュウゴハ……」

初めて聞く珍しい言葉の響き、まるで呪文みたいだ。そうか、世界の秘密の扉を開ける呪文なんだな。私は忘れないように、頭の中でキュウキュウ・ジュウニハ、ジュツキュ1・ジュウゴハと繰り返し返した。

1981年2月2日 唐川ビル『P』編集室

「小形くん、悪いけどお使い頼める？」

佐野さんが編集室のドアを開けて、私に呼びかけた。作業室で通販の発送作業をしていた私は答えた。

「はい！」

佐野さんの頼みならよろこんで、心の中でそうつぶやく。佐野さんは毎号『P』の表紙を担当しているデザイナーだ。髪の毛が胸まであって、すらりとした美しい人だが、残念ながら編集長の奥さんでもある。

物静かで賢そうな佐野さんだけど、どうしてあの、いつも不機嫌な編集長と結婚したのだろう。なんだか不似合いじゃないか。ある日疑問に思っ、数年前から編集部に入入りにしていても知っている高校中退の山ちゃんに聞いたことがある。するとしたり顔で、

二人は幼馴染みで、ずっと昔、まだ九州にいる頃に編集長が拝み倒して一緒になったんだよね、と教えてくれた。そばで聞いていたラブコメと時代劇好きの女子大生、芝ちゃん「断り切れなかったのね——」とため息をついた。

「この原稿を駒津さんに届けてちょうだい。駒津写植は行ったことある？」

「いえ、初めてです」

「新大久保の駅の近くよ。『地図帳』から地図をコピーして持って行ってね。はいこれ」

差し出された大きめの茶封筒は、何回も写植屋さんとの間を往復している使い古しだ。

表面には原稿用紙を裏返しにしてセロハンテープで留められており、駒津写植さま 広告原稿在中 佐野」と端正な字で横書きされていた。

私は佐野さんから茶封筒を受け取ると、壁に掛けてある「お使いバッグ」と呼ばれている白いキャンバス地の共用バッグをはずして、その中に入れた。つぎに編集室の真ん中の共有機に置かれた小さな本棚から、一冊のクリアポケットファイルを抜きだす。これが編集部特製の「地図帳」で、透明のポケット一ページずつには、写植屋さんだけでなく出版社などの取材先、かと思えば出前のとれる定食屋、あるいはカラーポジフィルムの現像所など雑多な地図が入っている。

その中から、私は「駒津写植」と書かれた地図を探し出すと、コピー機で複写し、四つ

折りにしてズボンのポケットにしまった。そして壁に掛けられたハンガーから自分のダブルコートをはずして着込み、お使いバッグを肩にかけると、共有機の引き出しから自転車のカギを取り出した。

「じゃあ、いつてきます」

そう言うのと、勢いよくドアを開けて外に出た。見上げると、ビルの谷間に冬の青空が広がっている。中空を横切る電線を、ビル風がビュウと鳴らした。私は唐川ビルの横の駐輪場に回ると、薄汚れた買物自転車を引き出す。ポケットから駒津写植への地図を取り出して道順を確認すると、スタンドを蹴り上げて、ペダルをぐいと漕ぎだした。

同日、新宿区百人町一丁目、駒津写植

駒津写植は新大久保駅の裏手にある、何もかも古ぼけた鉄筋コンクリートのマンション一階にあった。一階のエントランスを入って、薄暗い共用廊下を進んだ一番奥が駒津写植のようだ。廊下を歩きながら、ガシャン、ガシャンという写植機独特の機械音が聞こえてきた。よかった、駒津さんは出かけてないようだ。

「失礼しまーす、Pです。原稿をお持ちしました」

表札の“駒津写植”の文字を確認すると、そう言うて私は金属製のドアを開けた。部屋の奥にはまるで岩山のような大きな写植機が設置されていて、その前に半白の長髪で痩せた男性が、回転式の丸椅子に座って、私に背中を向けたままガシャン、ガシャンと音をさせて写植を打っていた。この人が駒津さんのようだ。

駒津さんは私のことなどお構いなしに、手早く、しかしリズムカルに写植を打つ手を休めない。いいチャンスだ、前から興味があつた写植機というものを、この機会によく見てやろう。

写植機は大きな金属の塊が組み合わされてできている。全体は幅が一メートルちょっと、高さが一・五メートルほど、奥行きは一メートル足らず。それが下半分の焦げ茶色の台座部分と、その上に乗った明るいクリーム色の本体部分とに分かれている。上半分の本体部分の正面は、レバーやスイッチ類が配置された銀色のパネルがあり、オペレーターはここを操作するようだ。そして、台座部分と本体部分の間には十センチほどの薄暗い隙間が広がっており、その隙間の底には幅一メートルほどある可動式のガラスプレートが設置されている。駒津さんは左手でプレート前面の持ち手を握って前後左右に動かし、ある瞬間それをピタッと止めると、本体から飛び出している短いレバーを右手で“ガチャン”と打ち下ろしているのだった。

遠慮がちに駒津さんの背中越しに写植機を覗き込むと、駒津さんが左手で自在に動かしているガラスプレートには、文字が裏返しでぎっしり記されているのが目に入った。隙間になっている空間の中央には、先端が一センチほどの四角い枠になっている透明なプラスチック棒が、上の方からプレートの近くまで伸びている。固定されたその棒の先に、ちょうどスポットライトが当たるようになっていて、その光がガラスでできたプレートの文字も照らし出してカッコいい。

そうか、この光が当たった透明の枠の中に、目的の文字が収まるようプレートを動かし、うまく位置を決めところで、ガチャンとレバーを下ろして印字するという仕組みのようだ。駒津さんはプレートのどこにどの字が記されているか完璧に暗記しているようで、まったく迷いのない動きでガチャン、ガチャンと小気味よく印字を続けていた。

駒津さんの正面にある銀色のパネル部分には、小さなスイッチや十センチ余りの表示盤が何かの数字を映し出している。他にも印字レバーの右側には、電卓のように数字や文字が刻まれたキーがたくさん並んでいる。駒津さんは時折キーやスイッチに素早く触れているが、私にはこれらが何をやるものなのか、想像すらできない。

そして写植機の正面左上には誇らしげに円形のバッジが銀色に輝いていて、よくみると“PAVO-JL”と刻印されている。パボ・ジェイエルと読むのだろうか、聞き慣れない

語感だが、それがこの写植機の機種名らしい。

一つ私に分かったことは、このでっかい機械はとてつもなく微細で精密な操作が可能で、それを文字通り手足のように駆使して、駒津さんは写植を打っているということだった。

写植機から目はずして部屋を見回すと、天井が高く白い壁が目立つ十畳ほどのワンルームだ。建物は古くさいが、室内はきれいに掃除されている。部屋の四分の一くらいを占める写植機の手前には小さな机と椅子があり、机の上には緑色のゴムマットが敷かれている。濁った緑色の写植糊の丸缶、それから烏口、シャープペンシル、カッターなどが刺さったペン立てもあるから、ここで版下制作や写植の切り貼りをしているようだ。

部屋の奥の壁には、なにやら黒いカーテンが掛かっている。その奥はどうなっているのだろうか？

しばらくすると、駒津さんはようやく手を止めて私の方に顔を向けた。五十歳くらいだろうか、肌の艶はなく銀縁眼鏡の奥の眼光は鋭い。うわー、見るからに怖そう。

「もうちょっと待って。これだけ現像しちゃうから」

駒津さんは立ち上がって写植機の右上隅にある細長いハンドルを左手でつかみ、右手で写植機の奥の方を操作すると、左手でガコンと一部分を手前に引き抜いた。

これはビックリ、写植機の一部が取り外せるとは。引き抜かれた部分は幅三十センチ、

高さ奥行きともに二十センチくらい、横長の六角柱で、上部に持ち手のハンドルがある。駒津さんはその写植機の一部をバッグのように手に提げて、写植機の向こうを回って部屋の奥へ歩いていく。黒いカーテンを持ち上げると、表れたドアのノブを回し、部屋の中へ消えていった。

再び閉まった黒いカーテンの向こうからは、カチャカチャと何かプラスチックやガラスがぶつかるような音が聞こえてきたが、しばらくたつとブーンと鼻を突き刺す酸っぱい匂いが漂ってきた。

あ、この匂い。ちょっと前、写真がどうやってできるのか知りたくて、大学の写真部にいる友達に頼み込んで、実際に現像するところをサークル棟地下にある暗室で見せてもらったことがある。その時の匂いだ。

駒津さんは「現像しちゃうから」と言っていた。あの黒いカーテンの奥は洗面所を改造した暗室なのだ。写植機から引き抜いた六角柱のバッグの中には印画紙が仕込まれていて、そこに駒津さんが写真の原理により印字する。その印画紙を暗室で現像しているのだろう。その時、駒津さんがガチャリと暗室の中からドアを開け放った。狭い室内では暗室特有の赤色灯が点いたままなのが見える。カーテンを持ち上げて脇のフックに引っかけると、駒津さんはドアを開けたまま暗室の中に戻り、部屋の中に高く渡らせた針金に、洗濯ばさ

みで手早く印画紙を吊していく。なるほど、現像液を水で洗った後、こうして印画紙を干すのか。写真の焼き付けと一緒だな。駒津さんは赤色灯をバチンと消して暗室を出ると、ようやく私を見て言った。

「待たせたね」

私はすこし緊張しながら駒津さんに歩み寄ると、持ってきた大きな茶封筒を差し出す。

「これ、佐野さんの原稿です」

駒津さんは首からぶら下げたタオルで手を拭きながら、小声で「佐野さんか」と言って私から封筒を受け取ると、立ったまま中から何枚かの原稿を取り出した。あまり興味なさそうに手早く原稿を確かめていくが、途中で「おや？」という感じで手を止めると、一枚の原稿をじいっと凝視する。しばらくするとクククとうれしそうに笑いながら、誰に言うともなく駒津さんは呟いた。

「ひさしぶりに写植らしい指定を見たな」

それ、どういう意味ですか、という質問は呑み込んだ。私に向かって言ったようには思えなかったし、ヘタなことを聞くと怒られそうだ。私は駒津さんが機嫌のよいうちにお邪魔することにして、小さな声で「じゃあ失礼します」と断って駒津さんに背を向けた。

1981年2月4日 唐川ビル『P』編集室

次の私の出勤日は、駒津写植に原稿を届けた二日後だった。午前十一時頃、「こんにちは」とドアを開けたが、まだ編集室には誰もいなかった。予想通りだ。私は共有機の上に置かれた、B4判ほどの浅いプラスチック製のカゴに近づいた。

カゴは二つ並べて置いてある。一つは写植屋さんに持っていく封筒を、そしてもう一つは写植屋さんから戻ってきた封筒を入れる。見ると戻ってきた方のカゴには、私が二日前に持って行った「駒津写植さま 広告原稿在中 佐野」と書かれた封筒がある。よしよし、私はその封筒を取り上げると、机の上に中身を取り出した。

あれから、駒津さんの「ひさしぶりに写植らしい指定を見たな」という言葉の意味が、ずっと気になっていた。「写植らしい指定」って、どんな指定なのだろう？ それを確かめるには、駒津さんが打った写植、それに佐野さんの写植指定を見るのが一番だ。今日はそれを確かめてやれと思って、少し早めに電車に乗ったのだった。

出てきた袋の中身は、三種類あった。まず縦横二十センチほどの比較的小さな写植の印画紙、それにホチキスで綴じた数枚の原稿用紙、そしてA4のレイアウト用紙が一枚。まず私は印画紙を手にとった。

「これは……なに？」

その写植はページ横半分のサイズの、『P』とは全く別の雑誌広告のようだった。全体が太い罫線で囲まれていて、中央上部の一番目立つところには、細い罫線で囲まれた中身が空白の四角が置かれている。おそらく印刷入稿時にはここに雑誌のロゴが貼り込まれるのだろうが、今はこれが何という雑誌の広告なのか分からない。

ロゴが入るはずの場所の左脇には横書きで少し大きく月号と発売日が、右脇にはこれも横書きで小さく、聞いたことのない版元名と住所が入っている。これらの下には縦書きで、最も目立つサイズで記事のタイトルと、それより小振りに筆者名が、それぞれ特集、評論、連載の三つのグループに分かれ行儀よく並んでいる。

それら広告にいらんだ記事のタイトルからは、研究者が読むような学会誌がイメージされる。そういえば佐野さんは、『P』の執筆者でもあった小説家に推薦されて、お堅いので有名なある国文学専門誌の表紙デザインを担当することになったと聞いた。この写植はそうした佐野さんの副業の一つなのだろう。

しかし、それはいい。今の私にとって問題なのは、そもそもこれは「版下」と言えるのかということだ。この駒津さんが打ってきた写植は、版下用紙には貼られていないし、カッターで切り貼りした形跡もない、ぺらっとした一枚だけの印画紙、それなのに最初から

大小の文字が整然と配置されており、さらに囲み罫までもが写植で打ってある。つまり、印画紙を切り抜いて版下用紙に貼り付けるまでもなく、すでに印画紙の段階で印刷所に入稿する一步手前なのだ。なんだこれは？ この写植は、それまで私が目にしてきたどんな写植とも違っていた。

村西くんは写植指定を教えてもらってから三週間ほどがたっている。あれから私は村西くんに教わりながら少しずつ仕事を覚え、手伝いの合間に版下制作をやらせてもらえるようになった。

それでも版下制作の道はなかなか険しい。そもそも写植を真っ直ぐに貼ることがむずかしいし、それ以前の問題として真っ直ぐに貼るには写植の文字ギリギリにカッターで切り抜くことが必要なのだが、失敗して文字まで切ってしまう写植を台無しにすることもあった。ましてや書き味が固くて使いづらい製図ペンで、真っ直ぐにそして均一の細さで罫線を引くなど思いもよらない。

一体全体、どうしたらこのような版下いらすの写植が打てるというのか？ その謎はすべて、佐野さんが作成したレイアウト用紙にあるに違いない。そして、そこにある指定こそが、駒津さんが喜んだ“写植らしい指定”なのだろう。私はA4のレイアウト用紙を机の上に広げた。

「うわあ、きれい」

そのレイアウト用紙には、すこし濃い太めの鉛筆により文字と囲み罫が、打ち上がった写植と同じサイズ、同じ配置で手書きされていた。その上で色とりどりのカラーの細字サインペンにより、たとえば記事のタイトルは水色で、筆者名はピンクで、出版社名とその住所は緑色で丸く囲んである。

見ると右上隅には、凡例のように横書きで “水色……YSE G（とくに指示なきは28 Q）”、“ピンク……MYEM（〳18 Q）”、“緑色……MGKL（〳11 Q）”、“青色……MMOKL（〳11 Q）” などと、それぞれの色の細字サインペンで指定されている。

私にはそれぞれの略号の意味までは分からない。しかしたぶんアルファベットは書体名であり、カッコ内は基本となる文字サイズなのだ（もちろん「〳」は「上に同じ」）。つまりこの凡例が意味するのは、それぞれ固有の色で書体と基本の文字サイズが指定してありますよ、ということなのだ。

このレイアウトにしたがって写植を打つ人は、水色で指定されていればこの書体と文字サイズ、ピンクで指定されていればこの書体と文字サイズと、色を見ただけで書体名と文字サイズが分かるだろう。そして、基本外の文字サイズ、ツメや揃えなどは、個々の文字ごとに赤の引出線によって指定されている。これにより最低限の文字数で写植指定ができ

てしまう。つまり、シンプルで分かりやすい。ふーん、きれいなだけじゃなく、機能的なんだな。

しかし、このレイアウトの見所はまだあるようだ。よく見ると、囲み野の縦横のサイズは当然として、たとえばタイトルロゴ枠の縦横のサイズ、そして囲み野上端とタイトルロゴ枠上端との間隔、同じく囲み野上端と版元名・住所との間隔など、囲み野の四辺と個々の枠・文字との間隔が、赤ペンで書かれた矢印と数字により事細かく指定されている。ちなみに、単位はミリではなく全部「歯(H)」だ。

さらに、タイトルロゴ枠の三ミリほど下に、薄く細い鉛筆の線が囲み野の右端から左端まで横に引かれている。広告のメインとなる特集、評論、連載のグループの文字は頭揃えに一直線に揃えるレイアウトなのだが、それらを揃える線だ。この線にぶら下がるように、特集タイトルやら記事名から筆者名がすこし濃い太めの鉛筆で書かれている。

ここで注目なのは、この揃える線上の、それぞれの文字の上端と縦の中心線が直交するポイントに、赤ペンで一つ一つ小さな丸が打たれていることだ。その上で、揃える線上に並んだ赤丸同士の間隔が、やはり赤ペンの矢印と数字によって指定されている。

結果として、たとえば囲み野右端と特集タイトルとの間隔、そして特集タイトルとその左隣の記事名との間隔、さらに記事名とその左隣の筆者名との間隔、さらにその左隣の二

番目の記事名との間隔……という具合に、すべての行と行の間隔が指定されているのだ。

以前、村西くんは「行間は行と行の間隔」と説明してくれた。しかし佐野さんの指定方法は、同じ行と行の間隔を表すのでも、村石くんのとはかなり考え方が違う、たぶんより高度な方法なのだろう。

なるほど、こんな風にして一つ一つ細かく位置を指定することで、切り貼りなしの版下いらすの写植が打てるのだな。しかし、これは超高難度のウルトラCだ。なんといっても、全体が網の目のように入り組んでいるから、どこか一カ所の位置を計算ミスするだけで全体が狂ってしまう。佐野さんってスゴイ……。

「ああ、それ佐野さんの「組み打ち」でしょ」

その時、後ろから話しかけてきたのは、高校中退の山ちゃんだ。大きい図体に似合わない『別冊マーガレット』をこよなく愛する彼は、佐野さんと仲がよく、時々手ほどきを受けている。だから版下制作に関しては大先輩で、聞けば親切に教えてくれるのだ。

「組み打ちって？」